
双銃の聖職者

著作権

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双銃の聖職者

【Nコード】

N5213X

【作者名】

著作権

【あらすじ】

黒の教団、それは世界に破滅へ導く『千年伯爵』のシナリオを止める唯一の手段。

これはそんな黒の教団に所属する聖職者の話。

更新は亀、作者は初心者なので期待外れになる可能性、大

設定も原作と矛盾します。

それでもいいかたお手柔らかにお願いします m ((m

題名変えました。 m ((m

prolog

深夜、真つ暗な中、紫煙をはきだし盛大にため息をついていた。

「ハア、仕事が多すぎだ……………」

男はハア、と再度ため息をつき、足元を見る。そこには大量に壊れた機械の残骸が乱雑に散らばっている。

そこで男は吸っていた煙草の吸殻を足元の機械の残骸に落とし、足で火をもみ消してから一瞥すると再々度ため息をつく。

「ハア、ため息をつくると幸せが逃げていくって言うけど本当らしいな。」

男は呟くとマントを翻し、帰ろうと足を進める。すると、ギギッと機械独特の音を響かせ機械の残骸が喋る。

「キャハハツ、お前、は、なんだよな？チョー、気に、なる。キャハハツ」

機械の残骸は掠れながらも声をあげる。

「俺はエクソシスト、お前等をぶっ壊すためにここにきた」

といつても、もう終わったけどなどと男は苦笑混じりに言う。

「お前等が、伯爵さまの、言うエクソシストかよ、でも俺は、レベル2だぞ、そう簡単に……………」

「いくさ、何故なら．．．．．時間だ、じゃあな」

男は話を中断し、帰ろうとするが機械に呼び止められる。ハア、と今日何回目かわからないため息をつき、振り向く。

「なんだ？」

「伯爵さまから、伝言、だよ、 『時は満ちた．．．．．7000年の序章は終わり、ついに戯曲は流れ出す．．．．．開幕のベルを聞き逃すな．．．．．役者は貴様らだエクソシスト！！！！』 ．．．．．テメーらはおわりだエクソシスト！！！！」

その声を中心に次々と機械の残骸が覚醒する が男は構わないと歩き始める。その瞬間機械の残骸たちは爆発とその炎で機械たちはたちまち灰になる

「アーメン．．．．．」

男は呟くと再びマントを翻し闇に消えていった．．．．．

prolog(後書き)

駄文ですね・・・

自分がかいていて驚愕しました。

感想よろしく願います

第1話（前書き）

次話投稿です

第1話

此処は黒の教団本部、そこに今まさに任務から帰ってきた男は、口から紫煙を吐き出すとだるそうな足取りで、報告に向かう。

暫くただっ広いバルコニーを歩いていくと室長室と書かれた部屋の前に着く。そして、躊躇いがちにノックをすると、どうぞ、と返事が帰ってくる。ノックとは裏腹に荒々しくドアを開けると、カツカツと男のいる机のもとに歩いていく。ややあつて、自分を見る長身の男。コムイ・リー、中国人で重度のシスコンである。

「やあ、随分と時間が掛かったんじゃないかな？ 後、ここは禁煙だよ？」

「ほざけ、お前が時間の掛かる仕事を押し付けんだろつが。」

「それもそうだったね、海堂君。」

「チツ……………」

海堂は短く舌打ちをすると、任務の報告を始める。

「ロシアに有るって言われたイノセンスの件だが、残念ながらハズレだ。」

「そうか……………、じゃあ原因は？」

「アクマだ、それも飛びっきりの大漁だね。」

「飛びつきり？……………」

「・・・レベル2が16体、レベル1が20体だよ。」

「それはまた、多いね。」

「嫌になるよ・・・」

海堂は盛大にため息をつくつと、じゃあなと退室しようとする。

「待つて、任務帰り悪いんだけど、次の任務だよ。」

コムイが言つと、嫌な顔をして再び戻つて行く。

「なんだ？コムイ、内容によつては「来た・・・」寝るぞ」

海堂は言葉を遮られたことを内心不服だったが、コムイのしている方向を見る。すると、軽くノックをし、入ってきた青年に目がいった。神田ユウだった。長い黒髪を一纏めに縛っているのが印象的だ。

神田はずかずかと紙の上を歩いてくる。

「悪いね。朝早くから」

神田は薄笑いを浮かべているコムイをじつと見つめている。

「今度の「今度の任務はどこだ？」任務・・・」

神田は言葉を遮つた海堂を睨み付ける。

「ドイツだよ」

コムイは気にせず話しつづける。

「ドイツ北部にある、森林地帯のダンケルンという村なんだが、最近、その村に行った人が帰ってこないらしいんだ。『帰らずの森』という噂が立ってね。イノセンスによる可能性があるから探索部隊を行かせた。二日前のことだよ。」

「探索部隊の救出か・・・」

神田は何も言っていないのに任務の内容を決めつけた海堂を睨み、言う

「話を最後まで聞け、アホが・・・」

「いや、海堂君の言うとうりだ。実は探索部隊との連絡が取れなくなったんだよ。」

神田はチツと舌打ちをすると質問をする

「こいつと合同任務か？」

そうだよと、返事をするコムイを一瞥すると海堂は団服を翻し退室する。神田もコムイにわかった、というと退室していった。

「神田ね、強いか？・・・、ま、見てみないと分からんか。」

海堂は呟くとバルコニーを足早に歩いていった。

第1話（後書き）

小説を少しパクリました
すいません、次話はプロフィールです

設定（前書き）

設定書くだけなのに時間が掛かりました、本当にすみません。
さて、主人公の設定です

設定

- 海堂・M・クラージ -

原作開始時、

年齢 - 十八歳

身長 - 192cm 体重 - 82kg

専用イノセンス - 『断罪』《ジャツジメント》ver2

カスタム

クロス元帥のジャツジメントを改良し、二丁拳銃タイプにしたものの。

外見はクロス元帥をもつと若くして、赤髪、長髪ではなく黒髪で、短髪。少し跳ねている。

仮面は着けてなく、その代わり右目に眼帯をつけている。

性格は基本的に面倒くさがり屋で、自分に利のないことはやろうとしない。(任務は別)

戦闘は、二丁拳銃の乱射で行動、基本、任務は独りなのでチームワークは苦手

その他は順次追加していきます

設定（後書き）

ごめんなさい、これ以上思い浮かびません。(´・`・´)
マジごめんなさい。

第2話（前書き）

始めに．．．お詫びから申し上げます。

この度、原作から多量な転載を行いました。

この行為がダメ！．．．という方はブラウザバックを推奨します。
それでもいい．．．という方は下らない内容ですがこのままお進み
ください。

10/23日誤字、脱字修正

11/6日改稿

第2話

ドイツ北部の町、ミッテルバルドへ着く頃にはもう昼を過ぎていた。日が暮れる前には森を抜けなければならぬ。そんなことを海堂は考えていた。それは神田も同じようだった。

町の外れに行くと鬱蒼と葉の生い茂る森が見えてきた。

あれが、『帰らずの森』か。海堂はコムイに教えられた任務の詳細を思いだし、考える。

森の近くに来ると、神田は道行く老婆にダンケルン村への道を聞いていた。海堂は神田の後ろにつく。

「あの村に行くのかい？」

老婆は露骨に嫌悪の表情を浮かべた。

「あそこは昔からイヤな噂のある村なんだよ」

「イヤな噂？」

神田は訝しげに老婆を見ている。

「ああ。『魔女』が住んでいて、道に迷った子供を捕まえ、食っちゃうのよ」

海堂は堪らず、真剣そのものの顔の老婆を見て、ため息をつく。

この時代に魔女？馬鹿らしい。田舎らしい迷信だな。神田は何かを思い出しているような顔だった。大方、コムイのことだろう、と結論を出し老婆に再度注意を向ける。

「悪いことは言わない。『魔女の村』に興味本位で近づくのはやめな」

「ダンケルン村に行くには一本道があると聞いたんだが」

海堂と神田が帰る素振りを見せないのので、老婆は深々とため息をついた。

「しょうがないね。あそこに『ダンケルン村』って立て札があるだろう？あの道をまっすぐ行って森を抜ければ、村に着くよ」

「わかった。手間を取らせたな」

海堂たちは立ち去ろうとすると、老婆から声がかかる。

「でもあんたたち、本当に行くのかい？」

「「ああ」」

「あの村は最近、人が来ないって言われてるんだよ。つい二日前にも三人組の男が森に入って行ったが、戻ってきていない」

海堂の代わりに神田が答える。

「その三人を探しに行くんだ」

「ああ……」

老婆の顔に諦めが浮かんだ。戻ってこられるといいがね。そう呟くのを海堂と神田は聞いていた。

海堂と神田は立て札の横を通り、深緑の森に足を踏み入れた。

昼間だと言うのにその森はどこか夜の気配を漂わせていた。天を覆うようにみっしりと葉を茂らせた木々が、自分たちを静かに見下ろしている。木々はまっすぐ天に向かって伸びていた。重く、暗い森。まるで巨大な生き物の腹の中にいるような、そんな気分だな。海堂は気味が悪いこの感じをそう感じていた。

神田は後ろについて無表情とも何かを考えているともとれる海堂と黙々と歩いていった。

人の気配というものが全くない。もちろん探索部隊ファインダーの姿は影も形もない。

失踪した探索部隊ファインダーはこの森で何かトラブルに巻き込まれたのだろうか？

それとも村に着いてから、不測の事態が起こったのだろうか？『魔女の村』と呼ばれるダンケルン村で。

村の前にあるという谷はまだ見えてこない。

ひたひたひた。

常人には聞こえないだろう、潜めた足音が近づいてきた。

殺気だ！

神田が振り返った瞬間、耳をつんざくような銃声が聞こえた。

シューウウ・・・

神田が振り返った時、斧を振りかざす男の胸に穴が空いていた。シャツに茶色のベストをきた、木こり風の若い男だった。

神田は男に穴を開けた男に目をやる。そこには片手に拳銃を構え

て厳しい顔をしている海堂がいた。

神田は海堂に言葉をかけようとした、その時だった。神田はとっさに後ろにとぶ、次の瞬間、海堂が殺した男が爆発した。

ドンッ！

男は破裂するとガスを撒き散らす。

「アクマか、・・・」

海堂は神田が気付くまえに殺気を感じていた。なので神田よりも早く反応できたのだ。海堂は男に穴を開けた銃を腰のホルダーにしまつと、黒の教団特製のコートから煙草を取り出すと、火をつけるそして、口から紫煙を吐き出す。そしてこの後のことを考え、呟く、
「愉しくなってきたね、コリヤ・・・」

第2話（後書き）

更新するのは亀になります。

後、中途半端に止めてすみません。

感想、評価お願いしますm(_____)m

第3話

「愉しくなってきた

ね、コリヤ……………」

そう呟く男を凝視する。自惚れとは思わないが自分の反応速度は並みのエクソシスト……たった十数人しかいないが、中でもトップクラスの反応……だったはずだが自分より速い反応したに驚愕する。

その男は髪の毛をバリバリとかきむしり、だりい、だの、たりい、帰りにてえ、等といって面倒くさそうに煙草を吹かしている。先の方からは信じられないようなその行動に再度驚愕し、同時に心の中に、こんな奴に負けたのかと憤慨する感情が渦巻く。そんな心の葛藤にいてもたってもいられず、声をかける。

「おい、手前の名前はなんだ？」

神田はそういえば名前を聞いていなかったと思い、名前を答えさせるように言う。すると男は案外素直に答えを返す。

「……………海堂、海堂・M・クラージ……………」

男、海堂は素直に答えを言ったとは思えないほど、面倒くさそうな声色だった。

海堂

「海堂、海堂・M・クラージ．．．だ」

海堂は自分が発したとは思えない気後れした声を聞きながら考えていた。

（ド畜生がツツ！！なあ　にが、イノセンス回収任務だ！！．．．コムイの野郎、面倒くさい仕事押し付けやがって．．．探索部隊回収任務& a m p ;アクマの殲滅任務じゃねーか！！そりゃあ、探索部隊回収任務は聞いてたけどよ、いくらか面倒くさいじゃねーか！！）

海堂は心の中でコムイに復讐する決心をした。．．．．．そしてその頃ひとり優雅に．．．．．とはいかず、忙しさに涙目になっていたコムイは．．．．．

ゾクウ．．．．．

「ヒツ．．．．．」

背筋が凍りついていた。

（それにしてもアクマか．．．こりゃあ探索部隊はさっきの奴ら《．．．》に殺られたな。）

海堂はひとりため息をつく、さつきから考え事をしてきたため無視していた神田に向き直る。神田は訝しげに自分を見ていたが、話を進めようと思ったのか話しかけようとしたが、それは遮られた、かさりという木の葉を踏む音に．．．海堂と神田は無言でそれ

その得物を持ち構える。そして神田が声をかける。

「誰だ！」

「こ、殺さないでください！」

其処には、猛獣でも絞め殺せそうな太腕、巨大な体躯で情けなく降伏のポーズをとっている探索部隊ファインダーの男がいた。

?????

俺たち三人は探索部隊ファインダーの任務で『魔女の村』と呼ばれる村に調査に行くためその途中にある森を通り抜けていた。

「なあ、今回の調査つてよ、『入ったら最後、絶対に戻れない』んだとよ、おつかねえよなあ。」

「お、脅かさないでくれよ。俺怖いんだからよ。」

「ハハハッ！お前、相変わらずだなあ！こんな任務俺たちでばっばと終わらせちゃおうぜ。エクソシストに手柄横取りされないようによ！ハハハッ！」

そう俺たち探索部隊ファインダーはイノセンス回収任務が主な任務なんだけど、見つけた場合、本部に連絡してエクソシストに来てもらわなければいけないんだ。だから探索部隊ファインダーが本当に手柄をあげられるのは、長いこと探索部隊ファインダーにいるごく一部のんだ。そのせいでエクソシストの支持率は落ちている。特に『神田ユウ』というエクソシストは仲間さえ見捨てると言われている、お、俺は会って見たいけど、他の人達はやめとけって言ってる。気になるなあ……

そんな時だった。あの忌々しいAKUMA 《アクマ》とはち会ってしまっただのは……

……何もできなかった、俺たちはすぐに逃げ出して、一息着いたとき惨劇が起こった。まず、左の先輩ファインダーが胸を撃たれて、その次に、悲鳴を挙げ足を震わせている親友とも言えた同僚が撃たれた。

俺は悲鳴さえ出なかった。同僚が撃たれた瞬間、俺は走ってはしって走り抜いた。恐怖っていう原動力を持って……二日ぐらい逃げ回ったのか俺は時間も気にせず逃げ回っ手いたようだ。気が付くと、俺は最初にアクマに教われた場所に戻ってきていた。怖くなって、そこらの茂みに隠れて数時間たっただろうか、俺は体力の限界だったのかいつの間にか寝ていたみたいだった。慌てて周りを見渡すと、銃声が聞こえた。気になって茂みから様子を見ると男が銃を仕舞って、長髪の人と話していた所だった。よく見るとエクソシストの格好をしていた！こりゃ幸いと足を踏み出した瞬間エクソシストたちは一斉に得物を構えていた。恐ッッッ！

「誰だ！」

「こ、殺さないでください！」

我ながら情けない声だった。

男たちは自分を見て呟いていた。

「ウドの大木か・・・」

酷ッッッ!

第3話（後書き）

.....こんなんでいいんだろうか？

感想、評価お願いしますm（――）m

第4話

「ウドの大木か……………」

そう言ってしまうのも仕方がない。目の前にいる探索部隊ファインダーの男は心外だと言いたそうだが、目の前の男は情けなく降伏を示すポーズをとっている、説得力は皆無である。

「お前、探索部隊ファインダーの人間か？」

そんなことを、考えていると神田が男に声をかけていた。

「は、はい、ゴズと言います。その長い黒髪に日本刀……………エクソシストの神田さんですね？ 助けに来てくれたんですね。ありがとうございます！」

ゴズは大きい体をおるようにして、頭を下げている。自分、忘れられてるな……………と軽くショックを受けつつ、海堂は自己紹介をする。

「同じく、エクソシストの海堂だ。俺は暫くホームに帰ってなかったから、知らんと思うけど宜しく……………」

海堂は挨拶をしながら、手を差し出す。

ゴズは、目を輝かして挨拶を返す。

「どうも！ 俺探索部隊ファインダーのゴズって言います。いやあ、神田さんともうひとりエクソシストが来てくれるなんて……………」

ゴズは子供のようににはしゃいで、握った手を振っている。すると、神田がそれを不機嫌さがありありと見られる声で制す。

「今はそんなことをやってる暇はねえんだよ、それより、何があった？」

「仲間が二人殺されて．．．それからずっと逃げ回っていました。」

ゴズはその時を思い出したのか、苦虫を噛んだ様な顔をする。

「何があった？」

「この一本道を進んでいたとき、襲われたんです．．．．．ほんと、一瞬の出来事でした。俺たち探索部隊ファインダーでは敵わなかった．．．．．」

まあ、そうだろうな、自分たちエクソシストはともかく、探索部隊ダイでは手も足も出ないだろう。アクマはただの人間では傷つけることさえままならない。

「命からがら逃げたけど、俺、もうどうしようかと．．．．．情けない、目の前で仲間が殺されたのに、一人で逃げ回って、拳げ句のはてには迷ってしまうなんて．．．．．」

ガサツ．．．．．

ゴズには聞こえていないだろう、音が聞こえた。海堂は自分の得物『断罪』ジャッジメント ver. 2 カスタムを静かにホルダーから抜く。神田が鋭く言う。

「黙れ……………」

「え」

「新手がきた。」

その瞬間、四人の男が周りを囲んでいた。が海堂は緊張した様子もなく、ただ立っているだけだった。

男たちは海堂たちが襲ってこないとみると、一斉に襲い掛かってきた。

神田が殲滅するたびに見える、魔導式ボディ。

海堂はゴズが男に捕まるところを見ると、男の頭をためらうことなく撃つ。男が爆発すると、丁度神田もアクマを殲滅し終えていた。

海堂は思ったことを口に出す。

「ちょっと気になることがある。お前たちは先に行け。」

「え、でも一人は危ないんじゃない」「わかった」「神田さん！」

「頼んだ……………」

海堂は神田に感謝すると走り出す。頭に引っ掛かる何かを疑問に思いつながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5213x/>

双銃の聖職者

2011年11月11日07時40分発行